〔書評〕

Alexeï Evstratov, *Les Spectacles francophones à la cour de Russie (1743-1796) : l'invention d'une société*, Oxford, Voltaire Foundation, 2016.

奥　香織

本著は、モスクワとパリで学んだアレクセイ・エストラトフ氏の博士論文にさらなる検討が加えられた労作である。18 世紀のロシアでは文明は宮廷に集約され、都市部の文化との間に大きな隔たりがあり、演劇もまた皇帝（と少数の寵臣）のためだけに行われていた。真の観客が存在しないなか、エカチェリーナ 2 世の時代になると、宮廷だけでなく都市部でもフランス語劇が上演されるようになる。この上演を通し、「観客」ひいては「社交の場／共同体（société）」が出現することを論じる本著は、18 世紀ロシアにおけるフランス語劇上演の実態を明らかにし、文化史におけるその意義を明示する。

書名にある 1743 年はロシアに初めてフランスの劇団が定住した時代、1796 年はエカチェリーナ 2 世の逝去の年である。当時のロシア宮廷ではフランス語が日常的に使用され、お抱えのフランス劇団による上演が頻繁に行われていた。また、エカチェリーナ 2 世はヴォルテールやディドロと親交があり、フランスの劇団やフランス演劇の影響を受けて自らもフランス語で戯曲を執筆し、「洗練された風俗と文化」を表象・伝搬する場として舞台を活用した。本著の第 1 章、第 2 章ではこうした背景に目が向けられ、フランス劇団の詳細および宮廷の思惑との関係性、権力を表象する装置ともいえる宮廷のスペクタクル／祝典が論じられることで、ロシア宮廷における演劇、フランス語劇上演の位置づけが明らかにされる。第 3 章では当時のロシアで上演されたフランス語劇の詳細、第 4 章ではロシアで活躍したフランス劇団の演目（ジャンル・形式・作家など）が分析・統計化され、ロシアにおけるフランス語劇上演の重要性が具体的に示される。第 5 章では観客の受容、第 6-8 章では上演の場（宮廷から都市部への広がり）について論じられており、フランス語劇の上演を推進したエカチェリーナ 2 世の政治的な意図、彼女が文化的文脈において果たした役割が明らかにされる。こうした多角的な分析を通し、18 世紀ロシアにおいてフランス語劇の上演が政治的・教化的側面を持つだけでなく、さまざまな階層の人々をつなぐ媒体として機能していること、すなわち、これらの上演によって宮廷と都市部という「二つの文化」の差異が縮小され「社交の場／共同体（société）」が生まれることが浮き彫りとなる。当時のロシアにおいて、都市の文化、さらには国の文化を発展させ底上げする啓蒙活動の主軸となったものが演劇であったが、そこでは、女帝にとって啓蒙の手本であったフランスの演劇文化もまた大きな役割を果たしたのである。18 世紀のロシア宮廷における演劇の重要性はすでに指摘されているが、ロシア語で上演された劇を精査した研究はあっても、フランス語劇を体系的かつ学際的に扱ったものはこれまでにない。本著は、ロシア・フランス両国の演劇史に新たな視座を提示するものであろう。なお、巻末には、18 世紀ロシアの歴史、1762-1796 年にサンクト・ペテルブルクおよび他の宮廷管轄地で上演されたフランス語劇の演目一覧、この時期に活動したフランス人俳優のリストが付され、上演されたジャンルや形式、作品と文化的背景との関係性等が俯瞰できる配慮もなされている。

本著の主眼はフランス語劇上演の政治的・社会学的考察にあるが、本論はまた、ロシアにおけるフランス演劇の影響という観点、すなわちフランス演劇のロシア文化への移し替えという点からも興味深い。というのも、フランス劇団のロシア上演では、演目が同じであっても内容に変更が加えられることが多々あり、またエカチェリーナ 2 世が執筆した戯曲にも、例えばモンテスキュー『ペルシア人の手紙』の主題の変奏など、ロシアの社会的・文化的文脈への置き換えがみられるのである。異文化間の演劇交流、他文化への文学作品の移し替えという観点からみれば、本著は、演劇史だけでなく、より幅広いパースペクティヴでヨーロッパの文化史・交流史に新たな視点を提示するものでもあろう。